 ©2010 筑波大学生物学類

特集：キャリア支援

筑波大学で見つけた、もうひとつのキャリア / Another career found in Tsukuba University

染谷 悟（筑波大学 生物学類 2008 年 3 月卒業）

生物学類の後輩の皆さん、こんにちは。2008 年 3 月に生物学類を卒業した染谷悟(そめや さとる)と申します。大学時代、大変お世話になった林教授よりご指名を頂いたため、僭越ながら私のキャリアについてお話致します。最後のメッセージは皆さんに考えてほしいことですが、長々書いた自分の話はあくまで個人的な経験ですので、あまり参考にならないかもしれないことを申し添えておきます。

■ 研究者を目指した学生時代

私が筑波大学生物学類を志望したのは、実はセンター入試が終わった後でした。当時、私は『**将来、医師になって病気で困っている人を助けたい**』という気持ちから「東京大学医学部→医師」というキャリアを第一の候補として考えていました。しかし、この受験はさすがに大きな博打だと考えていたので、センターの点数を加味し、第二の候補として「筑波大学生物学類→医学の研究者」というキャリアを考えました。そして、前期では東京大学を、後期では筑波大学を受験し、筑波大学に拾って頂きました。大学入学前の私は「これからすごい医学の研究者になって、東大を見返してやろう」そんな気概を持っていました。

というわけで私は大学時代、勉強に打ち込みました。大学 1-3 年次は、学類の同期で最も多くの単位を取得し、卒業研究では澁谷研究室に入って朝から晩までアレルギーの研究に没頭しました。大学卒業後も、筑波大学大学院人間総合科学研究科に進学し、アレルギーの研究を合計 3 年続けることができました。修士課程の終わりには、1 学年上の生物学類出身の先輩と共著の論文を、免疫分野で世界最高権威の雑誌 Nature Immunology に発表し、医学の研究者への道が開けました。

http://www.nature.com/ni/journal/v11/n7/abs/ni.1886.html

■ 新しいビジネスをつくる”商社パーソンというキャリアへ

しかし、私は修士課程修了後、研究者にはならずに、三菱商事という民間企業に入社し、現在は商社パーソンというキャリアを歩んでいます。なぜ私が研究者というキャリアをやめ、民間企業で働くことを選んだのか。今回はそのきっかけをお話したいと思っています。

■ キャリアを変えたきっかけ 1：生物学類が教えてくれたこと

生物学類に入学した日、当時学類長だった林教授から言われた言葉を私は今でも覚えています。「この(入学生の)中には、生物学類に望んで来たわけではない人もいるかもしれない。もしあなたが、本当はどこか違う大学や学部に憧れていたのなら、そこには素晴らしいブランドがあるということだ。しかし、今日を限りにあなたの考え方を改めてほしい。そのブランドは昔、誰かが作ったものだ。あなたが今、自分の周りのブランドに満足していないのなら、今度はあなたがみんなの憧れるブランドをつくればいい。生物学類はあなたがつくるブランドです。」私はその日から「どうやったら生物学類が世界で最高のブランドになれるだろうか」を考えはじめました。学生が関われる生物学類の行事には全て関わり、その全てで少しずつ自分のアイディアを形にしてきました。「限りなく学生目線の大学説明会」を目指した 2006 年夏の大学説明会では、企画段階から会議で意見を述べさせて頂き、説明会の内容を教員の方々と一緒に考えました。説明会当日、私たち学生は史上初めて後半部を完全に学生主導の形で運営し、学生目線の会を作りあげました。この試みはその後も継承され、生物学類のスタイルとして今もずっと続いています。

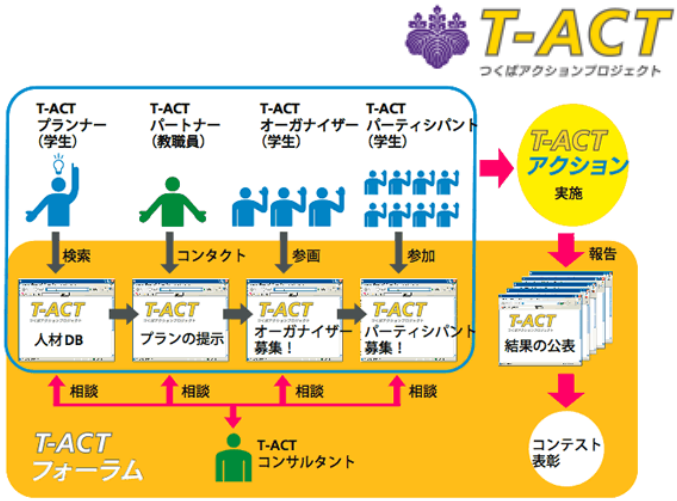
http://www.biol.tsukuba.ac.jp/tjb/Vol5No7/TJB200607SM.html

2007 年の冬、私は第 2 エリア A 棟で唯一汚かった「ひよこ(生物学類控え室)」を、1 年生の後輩たちと一緒に掃除し、壁を緑色に塗り替えました。ふらっと集まれて、しっかり勉強できる部屋の雰囲気をつくるため、漫画や過去問、授業ノート、参考書、教養本、海外の研究雑誌を置いたりしました。「ひよこ」の本棚には、今でも私のノートが残っています。生物学類には「なんかしたい！」その気持ちを受け止め、伸ばしてくれる素晴らしい文化があります。「研究マインド応援プログラム」しかり、先生たちは様々な学生の気持ちを応援するシステムを作り続けています。そんな生物学類で、私は『**身の回りの環境を自ら変える楽しさ**』を学びました。

■ キャリアを変えたきっかけ２:課外のボランティア活動が教えてくれたこと

入学当時、私は大学受験での失敗から「自分は勉強じゃ一番にはなれないんだな、自分はどんな能力だったら社会に貢献できるんだろう？」そう考えはじめました。「今まで注目してなかった自分の能力ってなんだろう？」そう思ったとき、高校まで熱心に取り組んだことのなかった部活が思いつきました。「集団活動で一度とことん人と関わってみようか、人と上手くやっていく能力は、きっと研究者になったとき、研究室のマネジメントにつながるだろうし」と思い、大学入学後は積極的にサークル活動に取り組みました。私は大学にいた 6 年間でボランティアを中心とした 19 以上のサークル・NPO・プロジェクトに関わり、12 以上の団体でリーダーまたは副リーダーを務め、大学生活を通じて、数え切れないほど多くの学生や社会人、子供たちと関わり、つながりを得ていきました。この中で、私は『**人と関わる楽しさ、人をマネジメントする楽しさ**』を覚えました。

2005 年にはもう一つの転機がありました。サークル活動の中で出会った友人がずっと大学に対して持っていた夢を、私は思い切って企画書に仕上げ、当時の高橋 学生生活担当副学長に直談判しました。その企画書は様々な変遷を経て、2008 年に、学生支援 GP 共創的コミュニティ形成による学生支援「T-ACT」として形になり、始動しました。私は人の夢がかなう瞬間に関わらせてもらい、実現していく瞬間を目の当たりにしたのです。http://www.t-act.tsukuba.ac.jp/ この経験から私は、『**想いを形にする楽しさ**』も学びました。



■ 私のキャリア観:毎日が楽しくてワクワクする人生を送りたい

私は 2008 年 4 月 1 日の午前まで「医学の研究者→大学教員」をキャリアとして考えていました。しかし大学院に入学した当日の 4 月 1 日午後に研究室で行った、澁谷教授との個人面談の一言がきっかけで、そのキャリアは大きく変わりました。教授は言いました。「染谷くんは今の研究が楽しいですか？私は、あなたが研究をしている姿を見て、研究を本当は楽しんでいないのではないかと思っています。医学の勉強をしている時、研究のミーティングをしている時、ピペットマンを握っている時、動物実験をしている時、私はあなたが心から楽しそうにしているところを見たことがありません。あなたは研究という今の仕事を続けて、楽しいですか？」私ははっとした気がしました。そのひとことから「自分にとって楽しいことってなんだろう」と私は 2 ヶ月間悩みました。そして、最後には心の底にしまっていた『**人と関わる楽しさ**』『**想いを形にする楽しさ**』『**身の回りの環境を変える楽しさ**』を思い出しました。

「『**困っている人の力になりたい**』その気持ちを叶えるのに、どうせだったら毎日が楽しくてワクワクする道を選びたい」。研究室で毎日を過ごし、仕事の質を追求していく道のりよりも、色々な場所へ足を運び、自分のアイディアを人に話してチームやビジネスをつくる道のりのほうが、歩いていて楽しい。それが研究者のキャリアをやめ、民間での就職を選んだ私の理由です。就職活動では上記 3 つの『楽しさ』をとことん追求し、医学の大学院生には珍しく、研究職や医療関係は 1 社も受けない就職活動を展開しました。就職活動中様々な企業と出会い、話し合う中でだんだんと「総合商社」という業態に自分の楽しいことが詰まっていると分かりました。自分の知らない業界を 1 から調べ、OB を訪問し、自分の志望動機を固めていくことは大変でしたが、努力が実り、最後は第 1 志望の三菱商事株式会社に入社できました。

三菱商事

数多くある総合商社の中で三菱商事を選んだのは、そこで働く人たちの人柄に惹かれたからです。どこまでも就活生目線で、面接などでも時間をかけ、一人ひとりの持つエピソードやそこに込めた想いを聞いてくれる会社の姿勢に対して、「この人たちと一緒に 40 年働きたい」と、私は強く思いました。内定に至るまで、まさに激戦だった私の就職活動の詳しい様子は就職課にレポートが残っていますので、興味のある方はそちらをご覧下さい。

■ 私がこのキャリアでしたいこと

三菱商事は、坂本竜馬の時代に端を発し、海外貿易をはじめとして様々な新しいビジネスを、常に日本の最前線で作り出してきた会社です。私はこの会社の一員として、世界中に未来のビジネスをもっともっとつくり続けていきたいと思っています。資源のない国が資源を生み出せる仕組みづくり、世界の新興国の水・交通・発電インフラの開発、企業主体の総合学習のモデル作りなど、「地球」レベルや「日本」レベルの大きな世界で、私はやりたいことがたくさんあります。

しかし、私はそれと同時に「身近な人たち」にも同じように貢献したいことがあります。三菱商事で働く中で、「世界でビジネスを展開するための手法」や「海外とのネットワーク」が得られたら、研究職を選んだ多くの友人たちの研究成果や、起業を目指す後輩たちの熱意を、「具体的なビジネスの形」にして、世界中に展開して、もっと社会に還元する直接的なお手伝いをしたいと思っています。彼らの夢が成長を続ける世界市場の中で花を開き、実を結ぶための道(ルート)に、私は

なりたいと思っています。

ビジネスが間接的に皆様に貢献できることは、皆様が日々使用している研究費や大学での教育費を供給しつづけることです。国の税金がもととなる研究費や大学での教育費は、人口減少に比例した経済規模縮小により、今後どんどん少なくなっていくでしょう。そうなったら、未来の子供たちは私たちのように十分な研究費、教育費を受けることができず、学びたくても学べない、研究したくてもできない、そんな環境が増えていくかもしれません。私は先輩たちが自分たちに残してくれた研究費、教育費を増やすことはできなくても、同じくらいの額は後輩たちに残したいと思っています。だからこそ、自分自身が大きなビジネスを作り、日本の経済規模が縮小しないよう努力すると共に、日本の大学、特に筑波大学が独自にお金を稼げるための仕組みづくりをお手伝いしていきたいと思っています。

■ 後輩の皆さんへメッセージ

大学時代は、自分の「将来」ってなんかよく分からないし、考えるのも難しいと思います。偉そうに語っている私も、実際そうでした。筑波大学にいると大学教員、研究者、学生ばかりと出会う生活なので、全体的な「社会」というものが良く分からないと思います。だけど、しっかり考えれば、自分の「今」だったらきっと分かると思います。「自分は、何をしている時が一番楽しいのか」「どんなことが優れているのか」「どんなことが不得意なのか。」自分が好きだと思うことが何か一つでも見つかったなら、それを信じて一度一生懸命やってみる。ひと段落したら「これを 40 年間やり続けても、楽しいと思い続けられるかな」とちょっと考えてみる。自分の好きなことが見つからない人は、とりあえず色んな人に会ってみる。特に、楽しみを見つけている人に会ってみる。そうしたら、その人がなんで楽しんでいるのか、なんとなく分かってくる。

世間では就職活動のテクニック本が溢れています。人からよく見られるために、どうすればいいか多くの方が本に書いて残しています。しかし、本当に大切なあなた自身のオリジナルストーリーと、あなた自身が将来やりたいことは本には一切書いてありません。本当に一番大切なことは人が教えてくれるんじゃなくて、自分で気付くしかないのだと思います。だから私は就職活動中、いわゆる就活本を、まったく使いませんでした。代わりに自分という人間を、強いところも弱いところも見つめました。何が好きか、どんな仕事をしたいか、一生懸命考えました。それを会社に伝え、共感をして頂き、一緒に働く仲間として迎えいれてもらいました。

就活が終わった後 2009 年から 2010 年にかけて、私は 200 名以上の後輩の就活生のエントリーシートの添削と面接やグループディスカッションの対策を行ってきました。自分のやり方は正しかったのか、不安に感じながら。そうしたら、やはり後輩たちでも就活に成功していったのは「就職活動本」と向き合った人じゃなく、恥を忍んでいろいろな社会人に会いに行き、「自分」と向き合った人でした。だから今キャリアを考える時期に来ている皆さんにも同じことを伝えます。

私がこの文章を通じて皆さんに伝えたかったメッセージ、それは「**自分自身のオリジナルストーリーを、自分で気づき、自分で紡ぎ、自分で語れること。それができる生物学類生に、アカデミック、民間、公務員、その他多くのフィールドで今後も輝いてもらいたい**」です。今後も皆さんのご活躍を祈っています。

Communicated by Jun-Ichi Hayashi, Received June 21, 2010.
Revised version received July 7, 2010.